

2020 年度研究促進事業採択課題

横田祥子『家族を生み出す——台湾をめぐる国際結婚の民族誌』（春風社、2021 年）

台湾では 1990 年代末から、台湾人男性と中国・東南アジア系女性との国際結婚が社会現象として注目されてきた。その多くは専門的婚姻仲介業者の斡旋によるものでしばしば「人身売買」として非難されてきた。本書は、台湾の「業者婚」がどのような社会背景や仕組みのもとで成立しているのか、当事者は何を求めて「業者婚」を選択したのか、またこうして結ばれたカップルはどのように家族となっていくのかを論じたものである。

台湾の「業者婚」の背景には、再生産労働の国際分業化の進展のほか、女性の高等教育進学率、就労率の上昇、結婚・出産をめぐる価値観の変化がある。晩婚・晩産さらには非婚が進む一方で、台湾の漢民族の間では、「伝宗接代」つまり男子を出産し祖先祭祀を継承することが、結婚の重要な目的であると考えられてきた。社会状況の変化にも関わらず、結婚し男子を出産せねばならないというプレッシャーは依然根強く、台湾人男性は業者婚に活路を見出した。

これまで国際結婚は、社会学分野で中心的に研究されてきた。国際結婚の背景は極めてグローバル的である一方、台湾やインドネシアの調査では当事者の国際結婚に対する解釈は伝統的慣行と地続きのものであった。そこで本書では、結婚における女性の地位や贈与といったオーソドックスな文化人類学的観点から検討を試みた。

第 I 部では、国際結婚がピークを迎えた 2000 年代半ばから後半にかけて台湾の地方都市 Z 町で行ったフィールドワークに基づいている。第 II 部は、結婚移民女性の出身地の一つ、インドネシア西カリマンタン州でのフィールドワークに基づき、女性の送出状況を描くとともに、2010 年代以降の台湾の結婚移民について述べている。

本書の中から 2 つ章を紹介したい。第 4 章では、アリーナとしての家族として以下 2 点を論じた。「業者婚」は「人身売買」としてしばしば非難されてきたが、Z 町での人々の否定的反応は必ずしも人道的見地からのものではなかった。それは結婚をめぐる位置づけによるもので、圧倒的経済格差や花嫁が持参財を伴わず婚入することで、望ましいバランスの贈与を欠いていたためであった。また、結婚移民女性は、台湾から出身社会への送金を望むが、結婚当初、送金は夫婦間のトラブルの元となる。贈与、ケア労働をめぐる交渉を通じて、夫婦は均衡点を見出していた。

第 5 章では、インドネシア西カリマンタン州の華人女性の送出の系譜をまとめた。当初は離婚した女性や寡婦が外省人退役軍人に嫁いでいたが、国際結婚ブームが起きると若年化が進み、年長の娘から複数人が海外移住するようになった。同時に台湾のみならず、漢族・華人が一定人口を占める香港、マレーシアの男性と結婚する例が増加した。さらに今日、当該地域から送出される女性はダヤク人に、移住先は中国大陆へと変化しつつある。